

## 今も残る大山道の道案内

大和市立緑野小学校6年 <sup>やまぐち</sup>山口 <sup>りなこ</sup>莉奈子

私の祖父母の家は神奈川県伊勢原市上粕屋の石倉バス停近くにあります。休日によく訪れますが、そのような休みの時には満員の大山行きのバスが祖父母の家の前をどんどん通り過ぎていきます。ある日、祖母とその光景を見ていたとき、祖母から、少し坂を下った石倉橋というところは江戸時代の大山詣でで様々な地方からの道が集まった交通の要所だったこと、そしてその様々な人たちが集まり歩いて大山を目指した「大山道」が家の目の前を走っていることを聞きました。こうした歴史ある祖父母の家の周りは、今第二東名高速道路建設によって急速に風景が変わってきてしまっています。私は、今のうちに、歴史を身体で知っておきたいと思い、昔の大山道やその周辺を歩いてみることにしました。

歩いていると古そうな石碑や石が置いてあるのを何度か目にしました。それらが大山道と何か関係があるのかもしれないと考え、私は地図上に大山道と石の位置を表してみました(地図)。そして、それらがどのような石なのか資料で調べてみました。

①の石は江戸時代に石倉橋に道標として置かれていたそうです。しかし第二東名高速道路の建設工事によって、鈴川のほとりに移されてしまいました。石は台座の上に道標、その上に不動明王という形をしていました。よく見ると道標の方ははっきりした文字も多く、左側は「右 いせ原 田むら 江乃島 道」、正面は「此方 ひらつかみち」、右側は「此方 はたのミち」、裏側には「左 戸田 あつき 青山 道」と書いてあるのが分かりましたが、台座は風化していて辛うじて凹凸が確認できた限りでした。風化していた台座部分について後に祖母に尋ねてみたら、建立に協力した人の名前などが書かれていて私の祖先である「山口源兵衛」の名も一緒に記されているとのことでした。この道標には年代の記載がありませんが、山口家の資料によると、山口源兵衛が生きていた年代が1822年～1882年なので、その時代に作られたのだと思われます。そして、この道標には、様々な地名が刻まれています。「田むら」「戸田」は大山帰りの渡船場に向かう道、「此方」は今の平塚のことで東海道の宿場に向かう道を案内していて、「厚木」は商業が栄えていた町だったので記されたということが資料から分かりました。また、「江乃島」は今で言う江ノ島のことで、当時は大山詣での帰り道に江ノ島詣でをする人が多かったため書かれたそうです。

②の石も道標でAの道の脇にありました。Aの道には千石堰用水路という、江戸時代に実際に生活用水として使われていた水路と併行している部分が数百メートルあって、②はその間にありました。道標には正面に「上り 大山道」、左側に「寛政十一末六月 當村 念佛講中」、右側に「下り 戸田道 厚木道」裏側に「右ハ田村道 左ハむら道」という文字が書いてあり、一緒に道祖神や庚申塔などが置いてありました。

③の石は②と一緒にあった庚申塔です。庚申塔とは、道教の教えに由来する庚申信仰に基づいてつくられた石塔とのことです。庚申塔に祀られる猿田彦が日本神話や庚申信仰で道案内の神だったことから道標の意味を持つようになったようです。文字はすべて解読できなかったのですが、資料によると、右側には「享保六辛丑天□ □□ 泰造立庚申供養」、左側には「六月吉辰 十一人 □□□ 大山道」と書かれているようです(□は解読ができない文字を意味します)。

私が見ることができたのはこの3つでしたが、資料から祖父母の家の周りにもっと道標などの石があると分かりました。そのいくつかを紹介します。

④の石はもともと三ノ宮辺りにありましたが道路工事によって移設された庚申塔です。「庚申塔」「寛政九丁巳 九月吉日 講中」「此方かな◇道」などが書かれているそうです(◇は「ひ」だと予想されるとのことです)。「かなひ」というのは平塚市の金目観音への巡礼の道として書かれたようです。

⑤の石は道標で、東名高速道路拡幅工事で移設され、Aの道の脇にあるそうです。「右いゝやまみち 七五三引村 ひなたみち」、「昭和九 辰年 正月吉 日」などとあるそうです。「いゝやま」は厚木市の飯山観音への巡礼の道として書かれていたようです。

⑥の石は現在「山口家住宅」という敷地内にある道標です。「大山道」、「右ひなた道」「左かなひ道 天保三己亥五月一日 七五三引村」などと書かれているそうです。

⑦の石はCの道の脇にありましたが今は近くの能満寺という寺院にて保管されている庚申塔だそうです。正面には「相州三之宮 庚申供養 左金目道」、右側には「元文四己未歳 十一月吉日」、左側には「右 大山道」という文字があるようです。そしてその上には不動明王像が乗っていたとのことでした。

⑧の石は庚申塔で、Aの道の脇にあったのが、今では近くの県営団地に移設されたとのことでした。正面に「右大山道 左金目道」とあるそうです。

今回調べてみて、大山道沿いの石や石碑は大山詣でにやってくる人々のために作られた道標の役割を果たすものが多いということ、また、その道標や庚申塔に様々な地名が刻まれていたことから、様々な場所から大山詣でに訪れていたことがわかりました。そして、私の先祖もその一人ですが、道標は地元の人が建てたものもあるということも確認できました。さらに、不動明王が乗せられていたり、庚申塔であったりすることから、現代にある、ただ行き先だけを案内する道標とは違って、人々の安全祈願などの宗教的な願いを含むものが数多くあることもわかりました。この他に⑨や⑩がありました。⑨は大きな石の上に小さい石が乗っていてAの道の曲がり角にあり、風化によりよく確認できませんが数字のような凹凸がありました。また⑩は地蔵のような像で丘のような場所の斜面に刺さっており、文字の記載もありました。両方とも、大山道に沿っていて曲がり角にあったことから道標だと考えましたが、はっきりした結論が得られなかったため、またの機会に詳しく調べたいです。

昔の大山道を石や石碑などに注目しながらたどって歩いてみると、昔の大山道が頭の中にくっきり浮かんできて、たくさんの人々が大山へ向かって歩いている姿が目に見えるようでした。今はほとんどの人がこの魅力ある道をバスで通り過ぎてしまうのがとても残念です。第二東名高速道路の建設で、今後ますます変わりゆく景色ですが、昔の大山道を知る手掛かりとしてこれからも残しておかなければいけないのだと強く感じました。

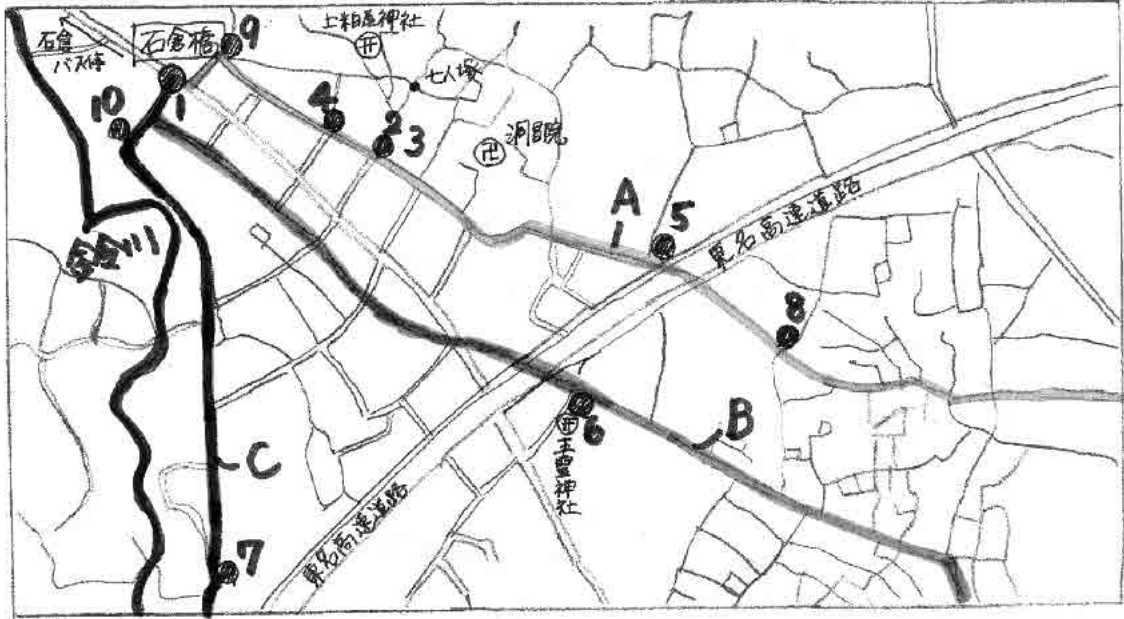
#### <参考文献>

伊勢原市教育委員会『伊勢原市内の大山道と道標』平成24年8月

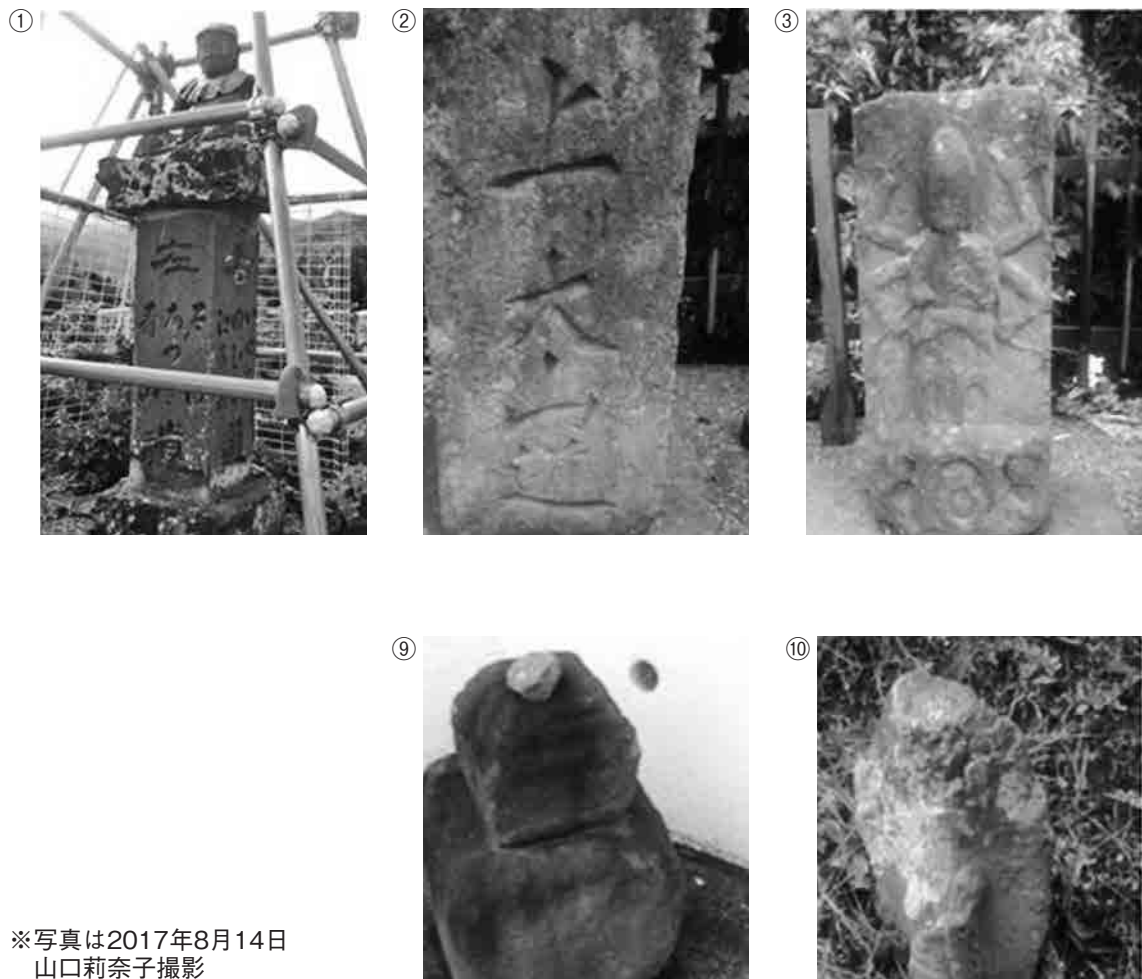
伊勢原市教育委員会『史跡と文化財のまち いせはら』平成13年3月

伊勢原市観光協会HP

地図：大山道と石の位置



写真



※写真は2017年8月14日  
山口莉奈子撮影

## 大人の話

板橋区立中台中学校2年 倉田 はな

私は毎年、夏休みとお正月に、母の実家である三重県津市で過ごす。今も元気な曾祖母、祖父、祖母と会うのが私の楽しみである。たとえ短い滞在期間であっても必ず行くのがお墓参りだ。お墓は祖父母の家から徒歩5分程の近い場所にあり、散歩途中に向かうのが祖父母の家で過ごすときの日課となっている。お墓参りのときに必ず祖母が私たちに話すことが、

「お墓では走ったらあかんよ。こけたら（転んだら）靴おいてかなあかんからね」

その言葉を聞くたびに、それまで田舎でのんびり過ごしていた私に緊張が走る。お墓は畑をこえたところにあるため足元はでこぼこ道。夏は蝉の鳴き声で草むらにひそむ虫に気づかないほど。もし、苦手なバッタがとんできたりしたら、驚いた拍子に転んでしまうかも。お墓までの道のりはいつもそんなはりつめた想いがして。一分程の距離もすごく長く感じてしまうのだった。

しかし、なぜお墓で転ぶと靴を置いていかなければならないのだろうか。母に聞いてみると、

「お墓は静かにするところだから、走ったりあわてたりして転ぶとダメだよ。靴がないと帰れないから足元に注意するようになってことじゃない？」

と。やや説得力にかけられる答えではあるが、なんとなく言いたいことが分かる気がした。

このことを友だちに話すと、

「え？何それ、聞いたことない」

と言われる。どうやら三重県だけの風習なのかもしれない。

こういった風習とは、いつどこで生まれ、こういった意味があるのだろうか。よく聞くのが、

“夜に口笛を吹いてはならない”

口笛を吹くと、蛇が出る。または人さらいが来る、といわれているが、いずれも不吉なことである。夜に口笛を吹くこと自体、周囲の迷惑となるであろうから、マナーとしてよくないところは理解できる。しかし、それだけなのだろうか。

そこで口笛について調べてみると、古来わたしたちは口笛を「うそぶき」と表現していたようだ。「うそ」とは口を狭めて出す音声の意味で、「鶯」という鳥の鳴き声に似ているため虚偽の鳴と同じ意味だとする説もあるが、「うそ」という音には神や精霊を招く力があると信じられてきたらしい。これらのことより、口笛は下品ということではなく、神聖な行為だからこそ、軽々で行うことを慎むようにと言われてきたことが分かった。

また、柳田国男さんの「遠野物語」には、夜中に笛を吹きながら峠を越えていた男の恐怖体験が書かれている。馬追いという仕事をする男は、笛を吹くことが得意で、よく夜に歩きながら笛を吹いていた。あるとき、その男に向かって見知らぬ誰かが、谷底から不気味な高い声で呼びかけてきたという。

峠とは国境のことで、ムラとムラのあいだ、つまり現世と来世の境界線のことらしい。また夜は一日が変わる時間、昨日という時間が死に、明日という時間が生まれる、生死の境界線ともとらえられる。こんなときに口笛を吹くことは、「神霊的存在を呼ぶこと」と

考えるのは自然なことだったようだ。

このようなことから、夜に口笛を吹くことは現実世界から離れた不思議な現象を招くかもしれないという意味があることが分かった。そして現代ではそういった不思議な体験を神聖なものというより恐怖体験としてとらえられるようになり、いつからか、本来の意味の意味から変化して忌み嫌われるような風習として伝わってしまったのかもしれない。

“お墓で転ぶと靴を置いていかなければならない”という風習も、もしかしたら神聖な意味をもっているのかもしれない。いつも祖母から言われるたびにお墓では静かにおとなしくしなければ、と思うのだから、この言葉の影響力は大きい。“夜に口笛を吹くと人さらいが来る、蛇が出る”も、そう言われると、静かにして早く寝ようと思う。しかし、本当の意味を知ると、決して怖いものではないし、実際に口笛を吹くとどうなるのだろうかに興味もわいてくる。

普段、何気なく聞いていた大人の話も、よく調べてみるとただ恐ろしいだけの話ではなく、昔から言い伝えられてきた不思議で神聖なものなのだ。

これからは、大人から言われても、「ああ、怖い」と逃げるのではなく、本当の意味を調べてみようと思う。日本人の風習を知るとはどんなミステリー小説よりおもしろいのではないのだろうかと思うから。

## 謎の「五四」－自治会の名前の由来

板橋区立金沢小学校 6年 <sup>かわち</sup>河内 <sup>すずか</sup>涼香

板橋区加賀には「加賀五四自治会」という自治会があります。しかし、加賀には1丁目と2丁目しかなく、4丁目と5丁目はありません。では、この「五四」という数字は何なのでしょう。前からずっと不思議に思っていたので、調べてみることにしました。

まず、加賀五四自治会の方にインタビューしたいと思いました。そこで、マンションの管理センターに自治会に連絡をとってもらい、自治会副会長の山田伸二さんの連絡先がわかりました。山田さんに電話して会う日時を決め、インタビューさせていただきました。

山田さんは昔から加賀に住んでいるわけではないようですが、自治会の『創立六十周年記念誌』の編集委員をしたので、加賀の歴史をよく知っていました。そして、2009年に発行した『創立六十周年記念誌』をくださいました。それから、「五四」の由来を資料にまとめてくださって、それを使って説明してくださいました。

加賀地区には、江戸時代に加賀藩下屋敷があり、江戸時代が終わると、その跡地に火薬製造所ができたそうです。戦後、板橋区加賀は米国進駐軍（GHQ）の占領下におかれ、その管理番号が54だったため、自治会の名前に使われたと言っていました。1948（昭和23）年、国からの借り受け・払い下げによって火薬製造所の土地は学校や研究所、企業になり、「五四団体自治会」ができました。これが自治会の始まりです。1964（昭和39）年に地域住民も参加し、1965（昭和40）年に地番表記の変更があり、「加賀五四自治会」という現在の名前になりました。加賀は昔、「板橋6丁目」だったそうです。

加賀藩下屋敷と火薬製造所があったことは、低学年の頃、東板橋体育館横の加賀西公園で記念碑を見た時に書いてあったので、知っていました。加賀藩は参勤交代で中山道を通っていたため、ここに下屋敷ができたそうです。本も調べたところ、参勤交代にはお金がかかりましたが、加賀は石神井川を使って舟で物を運べたことや、板橋には田畑が多く、ここで生産して本郷の加賀藩上屋敷の食糧にできたことも、加賀に下屋敷ができた理由に挙げられていました。1867（慶応3）年に江戸時代が終わると、1869（明治2）年に版籍奉還が行われて加賀藩下屋敷も明治政府へ返されました。そして、1874（明治7）年に下屋敷の一部に兵部省の火薬製造所が作られました。火薬製作所は陸軍の板橋火薬製造所、第二陸軍造兵廠（ぞうへいしょう）板橋製作所と名前が変わり、終戦まで使われました。

インタビューの中で一番興味を持ったのは、加賀公園には小さい山がありますが、火薬製造所ではその山に向かって試験射撃をしていたという話です。1年生の時に学校で「このあたりに爆弾が埋まっている」という噂を聞いたことがあったので、もしかしたら、その話とつながりがあるのかもしれないと思いました。

インタビューの後、火薬製造所があった頃の加賀の様子を調べたかったので、東板橋図書館と郷土資料館へ行きました。郷土資料館の職員さんに火薬製造所について調べていることを話すと、火薬製造所の資料を見せて、加賀に火薬製造所ができた理由も教えてくださいました。石神井川の水力を使って火薬を製造するためだと言っていました。本で見た加賀藩下屋敷の地図にも、石神井川に大きい水車がありました。今の石神井川は水深が浅くて底が見えるし、流れも速くないので、水車が回ったのだろうかと思いまし

た。

最後に、火薬製造所に関係がある記念碑や遺跡を見に行きました。加賀西公園の記念碑は火薬製造所の黒色火薬を作るのに使っていた圧磨機圧輪（あつまきあつりん）だとわかりました。低学年の時は説明を読んでも意味が理解できませんでしたが、説明には、「石神井川の動力が圧磨機を動かす上で重要な条件となっていた」と書いてありました。郷土資料館の職員さんが言っていたことと同じでした。それから、小さな広場だと思っていた「レンガパーク」は山田さんに火薬製造所の建物の一部を保存して作られたものだと聞きました。しかし、実際によく見たら、昔の建物を使っているのはほんの一部でした。

今回の研究で「五四」の謎が明らかになり、すっきりしました。「五四」の謎について調べたら、江戸時代の加賀藩下屋敷や明治から昭和時代の火薬製造所にまでさかのぼり、加賀の歴史を知ることができました。加賀には今も、下屋敷や火薬製造所に関するものが残っていることがわかりました。大学や病院では、今も火薬製造所の建物が使われているのに驚きました。そして、それらが参勤交代や宿場町など、私が知っている歴史とつながっていて、加賀には思った以上に歴史があったので、加賀をほこらしく思いました。

追記：五四自治会『創立六十周年記念誌』は副会長の田中さんが中心となって調べて編集したそうです。山田さんはその内容をもとにして話してくださいました。

#### 【参考文献】

- ・『板橋区・金沢市友好交流都市協定締結記念 中山道板橋宿と加賀下屋敷』板橋区立郷土資料館 小西雅徳編 板橋区立郷土資料館 2010年
- ・『加賀の歴史と自治会60周年の軌跡 創立60周年記念誌』創立60周年記念誌編集委員会編 東京都板橋区加賀五四自治会 2009年
- ・『加賀藩江戸下屋敷』奥山正 『加賀藩江戸下屋敷』刊行会 1987年
- ・『区制60周年記念 図説板橋区史』板橋区史編さん調査会編 板橋区 1992年
- ・『陸軍板橋火薬製造所跡調査報告書』板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編 板橋区教育委員会 2017年